日本G.A.P.ニュースレター
No. 4

目　　次

"円盤の訣別"の概要　その3 ―― 1
第2部　世界講演旅行
第1章「米国からニュージーランドへ」 ―― 1
第2章「豪　洲」 ―― 2
第3章「ダーウィンから英国へ」 ―― 3
第4章「オランダ女王との会見」 ―― 4
第5章「チューリッヒ事件」 ―― 5
第6章「旅行の終末」 ―― 6
第3部
第1章「悪魔すなわち時の人」 ―― 7
個人的体験を通じて求道へ ―― 10
ジョドレルバンクの神秘 ―― 13
雑　報 ―― 15
編集後記 ―― 17

アダムスキの第三番目の著書—

"円盤の訣別"の概要　その3

今回は"訣別"中の第二部及び第三部を紹介しますが、これでこの著書の概要の連載は完了致します。カッコ内の註は久保田によるもの、「　」内は原文の訳そのままを引用した文です。

第二部 — 世界講演旅行

『第一章　米国からニュージーランドへ』

◎ 一九五六年の終り頃、アダムスキとその協力者たちはメキシコ、ハリスコのチャパラで数ヵ月の休暇をすごしたが、この間にハイウェイ近くの空中に滞空していたドーム付の巨大な宇宙機をアダムスキは16ミリ天然色映画に撮影した。このフィルムは後に彼が世界講演旅行で各国を遍歴した際に重要な資料として公開した。

◎ "同乗記"の原稿をレズリー（デスモンド）かかりつけの出版社に送った頃から、霊界通信研究団体がUFO研究界に混乱を起し始めた。すなわち、宇宙人を霊的なものとみなす思想により、宇宙の驚異にたいする科学的研究態度を妨げることとなったのである。アダムスキ宛に世界中から質問状が殺到するようになったけれども、それにたいする回答は費用や時間の上から大変な仕事となってきた。そこで宇宙人（ブラザー）の指導により各国の協力者（コワーカー）に呼びかけて、アダムスキの代理として彼の回答や情報をコピーして自国内の興味ある人々に伝達する計画をたてよとの旨を知らせた結果、ただちに各国に協力者が蜂起して世界的な組織網が確立されることとなった。この協力はすばらしく、GAPと呼ばれるこの運動は急速に拡大していった。

◎ 一九五八年に濠州のGAP協力グループから費用むこう持ちでアダムスキに講演旅行をすすめてきた。これを契機として彼は世界講演旅行に旅立つことになった。（註。当時、日本にも立寄りたい旨の連絡が私宛にありましたが、残念ながらこちらで費用を捻出できず、ついにことわったいきさつがあります）

◎ 一九五九年一月十三日にロサンジェルス空港を出発。途中ハワイに寄ってここの小グループのために講演を行なった。フィージー島経由でニュージーランドに向い、一月十七日にオークランド、ウェヌアパイ空港に着陸。ヘンリー・ヒンフェラー夫妻と彼らの団体が主宰してニュージーランド各地で講演会を開催。いずれも大盛況で会場は皆超満員となった。ラジオ、テレビにも出演し、また政府機関が絶大な支持を寄せた。

◎ ニュージーランドに滞在中にメアルアワヒアのマヒナランギ宮殿で土民のマオリ族の王と会見することになり、アダムスキ一行は宮殿を訪れた。結局、都合により王には会えなかったが、一行は楽しい一日をすごした。宮殿を辞するときに巨大な8本の白い筋が飛んで去って、一同の興味をひいた。ハミルトンへ車で引返すときにまたもや円盤が上空を飛び交ったが、それはまるで一行を護衛しているかのようであった。この現象は他の機会にもしばしば発生した。

◎ その後一人のマオリ族婦人がアダムスキに語ったところによると、数名のマオリ族の少年が円盤に乗せてもらった事実があるということだった。アダムスキは講演でこの話をつけ加えた。するとニュージーランド・ヘラルド紙が、アダムスキはマオリの伝説である"月世界の女ロナ"に関する物語を焼直したのだと攻撃したが、これは誤った報道であった。

⊙ ニュージーランドの一研究グループのリーダーであるW・ミラー氏が夫人及び友人のN・ウェスト氏と共に、アダムスキがナピアーに向う前に別れを告げたあと、ロトルアのタウポ湖畔の上空で数十機の円盤群が空中で乱舞するのを目撃して、この事件は新聞に報道された。また百名以上のマオリ人を含むロトルアの多数の住民もヌアルアウヒアとハミルトンのあいだで二機の円盤が飛ぶのを目撃したという噂が流れた。

⊙ 二月五日、ニュープリムスで大歓迎を受けたアダムスキは市のホールで講演会を開いたが、夕方前に一牧師とその信者が町の上空を巨大な宇宙船が飛ぶのを目撃して、町の大評判となった。市民たちは宇宙船を見んものと再現するのを待ち望んだ。

⊙ 続いてニュージーランド南島のクライストチャーチへ渡り、各地で講演会を開いたが、いずれも大成功を収めた。ティマルーでは政府が援助してくれた。

（註。続いてアダムスキの世界旅行では、このニュージーランドが最も温かく彼を迎えた国であることを強調して、この章の終りで彼は次のように述べています）

「ニュージーランドにおける私の講演旅行の成果はすばらしく、各方面の協力はたいしたものであった。二百五十万のニュージーランド国民は心が開けていて、人生の珍しい出来事を渇望しているようである。私がもし若くて新しい住み場所を選ぶとなれば、私はニュージーランドを選ぶだろう。と思う。この国には多くの好機会があり、住民は友好的で親切である」

『オ二章　濠州』

（註。続いて濠州へ行きますが、ここではかなり攻撃されて多くのトラブルが起ることを述べています。それについてアダムスキは章の始めに次のようにいっています）

「濠州の各新聞社は私がニュージーランドで迎した名誉に驚いたので、大抵の新聞社は私の講演を好意をもって報導していた。加うるに円盤・宇宙人問題に関する限り、神秘主義と霊界通信との優位性を私はくり返し指摘してきたので、以上のことはサイレンス・グループ（註。アダムスキを抹殺しようとする暗黒のグループ）にたいする主な挑戦となったのである。彼らグループは濠州における私の講演を中止させようとしているらしかった」

⊙ シドニーに着いてからただちに新聞記者会見が行なわれたが、大抵がアダムスキの声明をゆがめて発表し、なかには彼が金星と火星に行ったと称しているというデタラメな記事を書いたのもあった。

⊙ シドニーのUFOグループは策略を用いてアダムスキを失脚させしめようとした。すなわち、濠州へ入国した外国人は如何なる仕事を行なう場合も政府の許可証を必要とするのであるが、グループはその必要のない旨を主張して、アダムスキを政府との紛争に巻込もうとした。アダムスキは不法講演を行なうことを拒否して事態は険悪になったが、ついに許可証を得てシドニーで講演を行ない、市民からは大歓迎を受けた。しかし検閲局は意地悪くアダムスキを追求した。

⊙ アデレイドで二回目の講演を済ましてホールの外へ出たとき、一行のなかの婦人連が上空を数機の円盤が飛び交るのを目撃した。

⊙ アダムスキがアデレイドを出発する前に、宇宙機の着陸事件が発生した。これは三月二十八日付の〝サンデー・メイル紙〟に発表された。三月十三日、アデレイドの北東十七マイルのパーノング郡に巨大なドーム型の機体が駒屋から離陸するのを二人の住民が目撃したという。大体二の数週間、多様、ノを帯びた円盤群がパーノングの上空を飛んでい

た。

◎ メルボルンではUFOグループ及び各新聞社から非常な歓迎を受けた。ラジオ放送も上首尾であった。次いでブリスベーンでも大成功裏に講演会を終えることができた。「ここでも他と同様に数百人の来会者が満員のために会場へ入れなかった。私はブリスベーンの新聞社、聴衆、研究グループなどのすばらしい協力をいつまでも忘れないだろう」とアダムスキは述べている。

◎ ブリスベーンに滞在中、アダムスキはたまたまソ連の空想科学映画 Blazing a Trail to the Stars（星々への道しるべ）を見たが、この映画のなかの二、三の場面はアダムスキがかつて実際の大宇宙船内で見た光景と殆ど同じであった。またその場面にはアダムスキがそれまで一般にたいして絶対に公表したことのない或る〝物〟があった。（註。これはきわめて興味ある記事で、アダムスキはこれについて、たぶんソ連にも宇宙船に乗ったことのあるコンタクトマンがいるのではないかと云っています。そしてソ連がこのような実際的な宇宙物映画を作り続けるとすれば、お化けばかり出て来る宇宙物映画しか作らない米国は、この方面ではるかに立遅れるだろうと警告を発しています。ところで、右の映画の題名はもちろん英訳ですが、これが日本に輸入されたものか、輸入されたとすればどのような題名で公開されたか私は（久保田は）知りませんので、もしお心当りの方がおられましたら、至急にお知らせ下さいませんか）

『オ二三章　ダーウィンから英国へ』

◎ 一九五九年四月十六日の夕方に、アダムスキはダーウィンを出発した。途中、シンガポール、バンコックを経てカルカッタに着陸した。ダムダム空港でインドのGAP協力者S・K・マイトラ博士とそのグループに迎えられた。「そして地上に降り立つと花環が私の首にかけられた。博士とその友人たちが私に挨拶したとき、柵の外に立っていたインド人の大群衆が歓声をあげて手を振った。彼らの心温まるまじめさと、私が世界へ伝えるように託されていたメッセージにたいする彼らの感謝とを私は感じたのである」ここでは時間の余裕がなかったために講演を行なうのは不可能であったが、アダムスキはバナラス・ヒンドゥー大学へ案内された。

◎ 次にカラチ空港へ着いたとき、空港の係員がアダムスキに驚くべき情報を伝えた。すなわち、パキスタンの国民は宇宙人のことを非常によく知っており、この男の出身地方の住民は宇宙人から種々の方法で援助を受けているという。また、過去十二年間に一、二度パキスタンの政府高官と宗教上の指導者たちが宇宙人（ブラザーズ）と食事を共にしたこともあるとつけ加えた。各国政府にも同様の事件が発生しているのだけれども、指導者層は自己の利益のために真相をひたかくしにしているので、各国民は何も知らずに政府を信じているのである。

◎ カイロ、アテネ、ローマを経て、一九五九年四月十八日にロンドンへ到着した。ここではアダムスキの支持者デスモンド・レズリーと、ジョン・M・レイド氏（註。現在〝フライイング・ソーサー・レヴュー〟誌編集顧問）が万端の世話を焼いた。英国で最も人気があり、九百万の聴視者のあるBBCのテレビ番組〝パノラマ〟で、アダムスキは英国の有名な天文学者パトリック・ムーアと討論形式で出演した。しかしこの結果はムーアの完全な敗北に終り、新聞はアダムスキの勝ちを宣して、一般の反応がきわめて大きかったために、ムーアは二カ月の休暇を与えられて、その間ムーアの収入源となっていたテレビ出演を禁じられた。アダムスキは彼を気の毒に思った。しかし、ムーアも月世界の〝オニー

…協会の存在を認める一人であるので、内心ではアダムスキに友好的であった。ただ天文学者としての立場から表面上一応アダムスキに反対せざるを得なかったのである。

◎ 四月二十一日火曜日にケンブリッジ・ウェルズでの講演会は英空軍大将のダウディング卿が主宰したが、ここでも政府の許可証が下りず、同様にて、アダムスキは不法講演を断固拒否したため、ついに質疑応答の形で開かれ、無事に終了した。

◎ 一旦ロンドンに帰り、四月二十五日にウェストン・スーパー・メアーの講演に行くためデスモンド・レズリーと停車場へ行き、予約しておった列車のコンパートへ入ると、すでに先客が一人座っていた。途中で会話してまもなくこの先客が実は宇宙人（ブラザー）であることがわかった！ 彼は英国政府で一科学者として働いている人であった。講演会は大成功だった。ロンドンに帰ってから四月二十八日にキャクストン・ホールで講演会を開いた。二十九日にはバーミンガム大学で講演会を開いたが、ここでの会合は教授団の手で行なわれた。続いてマンチェスターのフリーズ・ホールで講演、これも大成功であった。英国ではその他多数の講演会を開いたが、スコットランドの寒い気候のために、アダムスキは風邪を引いてしまったため、残りの講演は中止された。

『第四章・オランダ女王との会見』

（注。アダムスキがユリアナ女王と会見した当時、世界のUFO研究家やジャーナリズムのあいだで多くのひどいデマが飛ばされて、事の真相を知るのに私は甚だ困った記憶があります。以下はアダムスキが自ら述べている会見の模様の概要です）

○ 女王との会見の段取りをすすめたのは、オランダのGAP協力者レイ・ダクイラ女史で、アダムスキがまだブリスベーンに滞在中にその旨を連絡してきた。ロンドンにいるあいだ、各国の新聞はこのことでデタラメきわまる記事を発表し続けたが、なかには正直な報告を載せた新聞社もあった。

◎ 五月十六日、アダムスキはテレビ番組に出演の後、ハーグへ真夜中に到着した。十七日は一日休養。十八日の朝、宮廷さしまわしの車で出発。午前十一時に宮殿へ到着して文庫へ案内され、ここで女王、皇太子及び他の出席者すなわち、オランダ空軍参謀総長H・シャパー中将、航空医学の専門家、ユトレヒト大学のヨンゲブレト教授、アムステルダム大学のローイ教授らと共に会談した。雰囲気は友好的で、しかも皆がアダムスキの体験談に非常な興味を示したため、四十五分間という制限時間が実に二時間も続いたのであった。その間、質疑応答が行なわれ、女王は終始熱心な態度を示した。王宮を辞してからハーグでの講演会に出席し、記者連から会談の内容を聞かれたが、アダムスキはただ一言『女王から先に話し出すのが、女王の名誉なのです』とくり返すだけで、会談の内容には触れなかった。記者のなかには質疑応答付きの完全な捏造記事を書いたのもあった。とにかくユリアナ女王は知恵と愛とに満ちた偉大な婦人である。

◎ ホテルへ帰ってラジオ放送により、ソ連が月の地表の性質について、それが火山灰でなくて地球によく似た花崗岩の層から成っていることや、月の裏側に植物のように見える緑地帯を観測したという報導を聞いてアダムスキは大いに驚いた。これは彼が女王に話した事柄を確証するものであった。しかしそのときはソ連がどうしてこんな知識を得たのかわからなかったが、後に〃訣別〃の原稿を書いているあいだにどうもロケットで探知したらしいことが判明した。

◎ 五月二十二日、金曜日にアムステルダムの市立劇場におけるイタリ

ア映画〃死は大気圏外から来る〃の試写会に出席した。この映画の筋は次の通りである。地球の核水爆によって空間に吹き飛ばされた石屑（デブリー）が集まって巨大な小惑星（アステロイド）となり、ものすごいスピードで地球へ直進して来て衝突しそうになり、大破壊をもたらそうとする。各国の科学者は世界中の軍隊に核爆ミサイルをその小惑星に向けて一斉に発射するように要求し、かくてもとその惑星を作り出したのと同じ武器によってついに破壊されるのである。この映画のあとで、新聞社の代表達からこのような事が実際に起るかと質問を受けてアダムスキは回答されるかもしれない」と答え、次のように説明した。

「彗星は巨大の放射のすさまじい熱によって融合する目に見えない物質の微粒子から発生する。地球の大気の上層に吹き上げられた数百万トンの石屑（デブリー）が集まってくる。人工的な小惑星になるのは全く可能なことだ。その石屑の質量が大になればなるほど、付着する微粒子群にたいして大きな吸引力を持つことになる」一九五九年八月にメキシコで発生したあの大地震の直前に巨大な火球が山中に墜落した。その他地球に落下する火球のなかには核石と同様なものもある。

『第五章　チューリッヒ事件』

（註。アダムスキが世界旅行中に最大の恥辱を受けたチューリッヒの講演会の妨害事件についてかなり詳しく記されてあります）

◎　五月二十三日、アダムスキは汽車でオランダからスイスのバーゼルへ到着した。ここではスイスのGAP主宰者ルウ・ツィンシュタークス女史がすべての面倒を見た。五月二十六日にチューリッヒで先ず第一回の講演会を開いたが、これは大成功であった。しかし聴衆のなかにサイレンス・グループの手先がいて、講演会終了後にアダムスキとルウを吊レヒげようとした。これが最初の抵抗であった。続いてチューリッヒの警察署長がアダムスキの実写フィルムの個人検閲を要求した。許可証を持っているのに、これは妙な事であった。講演会の朝、ドイツの週刊ニューズ誌〃デア・シュピーゲル〃の記者二名とインタヴューしたが、同誌は後に会談の内容をほぼ正確に掲載して大いなる勇気と自主性を示した。五月二十九日に問題の第二回目の講演をチューリッヒで行なった。このとき警察から私服の警官隊が会場へ入った。七〇〇人の聴衆にまじって三〇〇人の学生が入り込んでいた。始めはよかったが、巧妙な作戦のもとに次第に学生たちが会場で騒ぎだして、ついに大混乱におちいった。学生が聴衆と乱闘を始めたために警察官の活動を要請したが、場内の警官隊は知らぬ顔をしていた。学生群は子供のラッパやその他の道具を用いて騒ぎ、放歌し、歓声をあげて野次り、ついに花火やカンシャク玉を爆発させて混乱は極に達した。映画が始まると今度はスクリーンをめがけてサーチライトを照射して映写の妨害をした。映写が半分まで進行したときに投げられたビール瓶が演壇にいた一婦人の肩にあたった。警官が場内灯をつけさせたために映写は中止され、会は終りとなった。アダムスキが会場の裏口から逃げ出して或るカフェーへたどり着いたとき、学生の一人がつけて来て謝罪し、煽動者が別にいることをほのめかした。後になって、大乱闘を演じたこの連邦工科大学の学生群を煽動した主謀者が別にいることがわかった。またこの事件について翌日スイスの大新聞は完全にデタラメな記事を掲げて、最も活躍したのはチューリッヒ警察だと書きたてた。

◎　その後アダムスキは健康を害して肺炎となったためにヨーロッパ各国の講演会は中止された。（註。当時伝えられたような、彼がチューリッヒで失敗したために、難を恐れて中止したという説は誤りのようです）各国GAP協力者は続々とバーゼルへやって来た。ドイツUFO

研究会々長カール・ファイト夫妻、オーストリアのドラ・バウエル女史、ミューニッヒのゲオルグ・ナイトハルト、イタリアのアルベルト・ペレゴ博士らである。アダムスキはロカルノで休養することになった。

◎ 世界の金融の中心地チューリッヒはサイレンス・グループの国際的根拠地である！ 金（かね）というものの影響力を及ぼす目に見えない手綱（たづな）が各国の団体をあやつるためにチューリッヒから伸びている。スイス銀行は各国の政府筋を踊らせている。

◎「ジュネーヴという所はスイス人が〝大賭博〟と呼んでいる者たちの指令にしたがって各国代表が互に駒として勝負をさせられている巨大なチェス盤である。このゲームはすべて中立というマントの下で行なわれる。故にスイスでは戦争を起してはならないのだ！」 社会の表面から隠れている世界政府の如きものがあり、金権の大君主たちは金（かね）の力によって、大衆が知識をたかめて向上するのを抑制するのである。要するにスイスという国は中立の美名のもとにサイレンス・グループの巣食う国なのである。また世界の心霊主義や神秘主義のグループがUFO研究界に混乱を起すことにより、間接的にサイレンス・グループを助けているのである。

『第六章 旅行の終末』

◎ 一九五九年六月十二日にルウ・ツィンシュタークに付添われてアダムスキはイタリアのローマへ出発した。空港でイタリアのGAP主宰者アルベルト・ペレゴ博士とそのグループに迎えられたが、講演会は中止されていたので、アダムスキは一行と共に市内の見学にきわめて楽しい二日間をすごした。十四日に小人数のささやかなディナー・パーティーがレストランテ・ラ・キステルナで開かれた。パーティーのあとで一同は街路をぶらついて、大通りへ出たときは真夜中であった。タクシーを拾おうにも一台も見当らない。このときアダムスキはテレパシーによりタクシーの来ることを感知してその場で予言した。するとまもなく突如一台の車が近づいて一同を乗せてくれた。運転手はアダムスキが米国人であることを言い当て、深夜から朝方まで市内をドライヴしてくれた上、その料金をとろうとしなかった。この驚くべき親切な不思議な運転手の正体についてはその後も謎のままである。

◎ ローマではアダムスキの講演会は行なわれなかったが、ペレゴ博士の講演会が開かれてアダムスキも出席し、聴衆から熱烈な大歓迎を受けた。またローマの他の一人の協力者フランセスコ・ボリメーニ博士はジャーナリストで各国の政界の裏面に精通していた。そしてアダムスキに数多くの隠れた政界の楽屋話をしてくれたが、これによって結局大衆が真相にたいして如何に盲目にさせられているかを充分に知ることができた。短時日ながらイタリアは忘れがたい印象を与えた。

◎ 六月十七日にデンマーク行の飛行機でローマを出発。コペンハーゲンで乗り換えて、グリーンランドとカナダのウィニペッグで燃料補給。サンディエゴに向かい、米国のパロマーへ帰って波瀾に満ちた六ヵ月の世界講演旅行は終った。しかしサイレンス・グループはなおも妨害を続けるかもしれない。（註・最後に次のように結んでいます）

「一つだけ確かな事がある。すなわちサイレンス・グループの手のなかにある最も強力な武器は〝一般大衆の無関心〟であるということだ！ この地球の周囲の遊星群に友好的な人類が存在する事実に関心をもたぬ人は、利己主義者側に最も容易に迷わされており、はからずもサイレンス・グループの道具として役立っているのである！」

（註。以上でアダムスキの世界講演旅行に関する部分は終ります。現在はだいぶ状況が変っています）

第二部

『第一章 悪魔(サタン)すなわち時の人』

（註。この章は実に素晴らしく、アダムスキのこれまでの記述のなかで最大の圧巻と云えるでしょう。すなわち彼の宇宙哲学を最も端的に表現したもので、その見事な文章とあいまって、まさに〃訣別〃の最後を飾るにふさわしい章です。これは体験記ではなくて、或る仮空の人物五名と一人の不思議な見知らぬ男との対話形式になっており、五名は社会の各層を代表する人物で、要するに理解力なき地球人の象徴であって、見知らぬ男はどうも宇宙人(ブラザー)を表わしているようです。著者の註によりますと、この章だけは一九五七年に小冊子として出したもので、現代の情勢に合わせるため書き直された個所があるということです。これこそぜひとも全訳でもって紹介したいのですが、紙面の都合で概要しか書けません。また非常に残念なのは、私の翻訳力と文章が貧弱なため、それにガリ版であることなどからして、原文の迫力をここでは到底伝え得ないということです）

先ず最初に、宇宙の神と悪魔ルシファー（註。ルシファーとは人間の内部の我の象徴です）とが広漠たる宇宙空間で問答を行なうが、神の宣告によりルシファーはついに天空から落下して地球の囚人となる。しかしルシファーはあくまでも宇宙の神を嘲笑して次のような宣言を放つ。

「地上の人間の忠誠を期待する、おお、愚か者の神、愚かしい神よ。ここでわれは人間を支配して、権力と宇宙天とを身につける方法を汝のこの幼な児たちに教えるであろう！」

一九六〇年の春まだ浅き頃、或る有名な山の茶屋の休憩室に、俗世間を逃がれ、憩い(いこい)を求めてやって来た五名の人々が座っていた。すなわち大実業家、若い陸軍将校、有名な老牧師、一科学者、工場の簿記係である。夜は更けて一同の会話は途絶え、しばし静寂が室内に満ちていた。すると突然、憐れみを湛えた声が聞こえてきた。「知りもしない理解もしていない或る力によって束縛されている哀れ奴隷と化した人間たち――」

驚いて一同が振り向くと、一人の見知らぬ男がいつのまにか室内に入っていた。奴隷という言葉に皆が聞き返すと、彼は、現代の人間を奴隷化させて支配している者は「悪魔(サタン)なのです。皆さん。悪魔(サタン)こそ時の人なのだ」と静かに説き始める。悪魔(サタン)と聞いて皆はこの男が牧師か何かで、古臭い神話に出て来る悪魔の姿をしたような者のことを云っているのだと思う。男はそれを否定して次のように話す。

「私が云うのは一つの力――今日の一般人の心を支配している攻撃的な力、無数の人間の心を通じて発現するうちに擬人化されるようになった力です。悪魔(サタン)として現われている利己主義と貪欲(どんよく)の力は、人間がそれを一人物として容易に口(くち)にし得るほどに、人類によって広く表現されるようになったのです。力にたいする欲望、個人的満足、および宇宙天などは、人間のなかできわめて大きくなっていますので、人類はその天賦の生得権を構成するあの宇宙的な特性を実際には見失っています。人類は悪魔(サタン)の監督の鞭(むち)の下にあがき、あぶら汗を流し、呪(のろ)っているのです」

先ず老牧師が口を開いて、背後に神をもった社会の宗教的要素が悪魔的な力に打ち勝つのだと反駁するけれども、見知らぬ男は、牧師などというものは実際には皆悪魔(サタン)の使徒なのだと答えて、これまでに教えられ

てきた宗教は〝想念の自由〟の正しさにたいする抑圧の象徴なのだと説く。

続いて科学者が口を出して、科学こそ人類を救うものだと駄論を述べるが、少数の真実の科学者の発見物を悪用しようとしている人が多いために科学でさえも自分たちの神を一時的な力としている人類を救うことはできないと見知らぬ男は語って、次のように云う。「——人類は知識を求めていますが知恵を求めてはいません。知性的であることと、知能の働きを支配するためにそれを賢明に応用することとは別問題です。現代の人間は心理的に幼児であり、知能的には巨人です。この二つがうまく調和していません——人間は生命と死の秘密を知るかもしれないし、生き物に息を吹き込ませることもできるかもしれない。その生き物から恐怖、利己主義、嫉妬、羨望、貪欲、憎悪などを取り除くことができるでしょうか。人間の知能に宿命的な死の恐怖の感覚を吹き込むことができますか。できはしない！それは各個人の仕事です—— 誰も自分以外の人間の性質を変えることはできないのだ。それをやる方法を教えてもらうことはできますが、しかし人間の道徳的、心理的な向上を導く人々が個人的な都合にしたがって人間の行為を善と悪とに分けながら、宇宙の法則を悪用しているというのに、一体どうしてそれがやれるでしょう」

次いで男は、かつてこの地球に存在したレムリア大陸について説明を始める。このレムリアは太古に地上の楽園として栄え、テレパシーで語ることのできた住民は無我の境で互に奉仕し合って、科学の発展もその極に達したが、いつの間にか悪魔が、すなわち自我を知る心が芽生え始めて、人々は五官を楽しむようになり、貪欲と分裂とにあがくようになった。

男の説明に続いて、一同の意識のなかに古代のレムリアの光景が浮びあがって来たが、それはすでに末路を示す姿であった。年月が閃光の如く過ぎ去った。長年月が過ぎ逝きて、続いて記憶のフィルムが、容易に忘れることのできない或る場面でハタと停止した。誠実にして謙虚な一人の導師が一群のレムリア人の前で熱弁をふるっていた。「目を開け、一大精霊の子たちよ！—— 汝らが自分自身とこの土地とを完全に破滅させる前に、この破壊的な分離の力を汝らの心から取り除け。この七カ月のあいだ大地は震動してきた。物質は勝利を得ようとしている。物質を汝らに抜かせぬように注意せよ！」しかし堕落しきったレムリア人たちは嘲笑して立ち去るだけだった。やがて大地に激変が起り、大津波が発生してこの大陸のすべては無に帰した。ここで悪魔は〝宇宙意識〟の神に向って勝鬨の声をあげるが、神はただ静かに云う。「私は待とう。ルシファーよ、彼ら幼な児が自己の自由意志で私のもとへ帰るまで——。私は待とう」そこで悪魔は図に乗って片っぱしから利己主義、貪欲などの竜の歯を地上の人間にばらまいた。

アトランティスなる高度に進化した大陸があった。ここもかつては、汚れを知らぬ美しい楽園であったが、ついには拝金主義に堕して競争が生まれ、分裂が発生した。すると、やはり一予言者が警告を発した。「黄金の神を捨てよ。真実の自我を取り返せ！」しかし金儲けに熱中したアトランティス人はこの言葉に耳も借さなかった。やがてアトランティスも消滅した—— 自然の手によって排除されたのであった。

続いて、男の声は古代エジプトの説明へ移る。この国も初期には兄愛と相互理解で栄えていたが、次才に宗教上の紛争が起り、四百五十体にものぼる神々を各種族が一体づつ信奉せんものと、ついに種族間で死闘を始め、やがてエジプトも宗教的偏狭さと迷信の塞のなかへ没してしまった。

宇宙の頁がめくられて、今度は血の渇望と残忍な蛮行のもやのなかからローマ帝国が勃興する。——軍部独裁による疑わしい栄光のすべてに包まれたローマ。剣と通す剣で引き裂かれ、ローマ人の鞭で断ち切られた人間の苦悩の上に、静かな、憐れみを湛えた一人の声が響いてきます。——「あなた方が何事でも他人からしてほしいと望むことは、他人にもそのとおりにせよ」

「だが人々の耳はツンボで目は盲いていて、心は石のようになっていた。古代ローマでの栄光は歴史の一頁にすぎないのです」と男は話してから、彼は現代の物質文明が破滅のフチにあることを説く。ところが五名の指導者はこの男のいうことがどうしても理解できないで、次々と愚劣な質問を発しては男をやり込めようとする。見知らぬ男はこの一斉射撃の前に黙然とうなだれていたが、やがて静かに口を開いた。

「皆さん」彼は語り始めた。「私はあなた方に人類の過去の誤ちを表現してもらい、それを皆さんはうまくやりました。あなた方各人の考えはちょうど過去の文明がやってきたように、極端に個人的な表現形式になってしまった。宇宙の法則に反するだろうから、私は如何なる分野でもあなた方のいう進化の正しさを否定はできない。ただ私がいうのは、進化というものは個人的利益のかわりに公益に向けられねばならないということです。私の意味するところは、あなた方が他人からしてもらいたいと思うことを他人にもしなさいということと、あなた方の心の石牢のなかに囚人を捕えているようなあの親切の感情を皆さんは表現しているということです。それで、もしかりに私があなた方からあなた方の神を取り除くとすれば、私はそのかわりに万人にとって等しい非個人的な〃創造者〃を与えたい。——善悪、正邪のいずれをも知らぬ創造的な力、すなわち『自分でまいた種は自分で刈らねばならない』という因果の法則、人生のあらゆる面での完全なバランス以外に人間から何物をも要求せず依頼もしない動・反動の原理を——」

一同はこの言葉が理解できぬままにその場を去って行った。室内の暖炉の前で見知らぬ男はただ一人で座っていた。「哀れ、奴隷と化した人間たち！私が束縛から解放してやりたいのはこのような人たちなのに」

立去って行くあの浮世の人々から笑声が湧き返ってきた。その声の調子には軽蔑しきったような嘲弄の響きがこもっていた。

続いて静寂が——しんしんたる静寂が満ちてきた。その深い静寂の作用そのもののなかで、それはあらゆる音響の空虚さをかき消すようであり、しかも一つの想念の印象を与えるようにも思われた。——古い古い一つの想念「私は待とう、私は待とう」——。

『第二章　結語』

（註。〃訣別〃中の最後の章としてここでアダムスキは簡潔な言葉で次のように述べています）

「私はこの書が円盤・宇宙人問題に関する読者の疑問の多くに答え、またこの探求の分野における私の立場を明らかにしたと心から思うものである。

空飛ぶ円盤の到来とともに始まった私の予備研究は一応終った。もちろん、このことはその問題を放棄したことを意味するものではなく、技術的、哲学的な線に沿ったより高度の知的な発展にたいする新しい計画が私と仲間とによって遂行されることを意味するのである。宇宙の兄弟によってわれわれに与えられた知識は今や活用されねばならぬ。私は、我々の進化にとって絶対に必要な二つの分野——宇宙哲学と科学——で進むようにと忠告を受けている——後略」

（註。以上で〃訣別〃の紹介は終ります）

ルーシー・マクギニス女史からの便り……

個人的体験を通じて求道へ

一月十日付でルーシーより久方ぶりに私信（最後の）が来ましたが、これは彼女がアダムスキのことを離れた理由について詳細を知りたいという私の依頼にたいする回答で、これで彼女の気持が大体明らかにされていると思われますので、重要な資料として全訳を次に掲げることに致します。

*

昨年十一月十日付のあなたからの最も歓迎すべきお手紙に返事が遅れたことをどうぞお許し下さい。私はそれを受取ってとても嬉しく、またあなたが年令を記しているのを嬉しく思いました。私には三十八才になる息子があり、他の息子は三十六才です。今私はあなたについて思いをめぐらし、私の息子たちの一人のようにあなたを愛することができます。長男には九才から十二才までの三人の息子があり、弟息子のほうには十七才になる娘と腹違いの同年の息子があります。弟は若いときに結婚しましたが、長男は結婚するまでにより長い体験と成熟とを得ったのです。あなたには子供さんがおありですか。あなた自身や御家族についてもっと詳しく知らせて下さいませんか。

あなたが英語を困難に思うことはよくわかります。東洋の多くの言語は別として、多くの理由から、英語は学ぶのに最も困難な言語の一つと考えられています。私も多くの言語を知るのは賢明だと思いますが、何も知ってはいません。スペイン語を少し勉強したことがありますが、マスターしませんでした。しかし私たちが互の言語を話したり理解できたりすれば、国家間に平和を確立するのにもっとよい機会があると思います。

あなたの私にたいする態度は非常に親切です。いつまでも変らない友情をどうも有難う。この過ぎ去った一年は私にとって多くの教訓（レッスン）の一つになりました。それは多くの点で役立つことになると思います。それが人生の目的ではないでしょうか。自分はこんなことを信じているのだと公言している物事に如何に一生懸命に従っているかを示すために、自分自身の内部を覗き込ませようとして自分の生活へ次に何がやって来るかは誰にも全然わからないことですね。しかしときどき覗き込むのはよいことです。あなたの友人たちがアダムスキにたいする不信のために、あなたから去ったとき、あなたはきびしい試みに会いましたが、しかし信頼し得る新たな友だちがあなたをとり囲んで支持しています。私がアダムスキを離れたことで、これまで親しみを感じていた人々（註。各国協力者のなかの或る二、三の人たち）が私に示した態度に驚きました。しかし私はその人々を非難していません。（註。ルーシーを非難して、彼女を協力網から除外せよと主張した協力者が少数いたことを意味します）彼らは理解していないだけのことです。長いあいだアダムスキのためにやってきたように、私はもうこれ以上他人のための代弁者になることはできませんし、また私は導師たる資格もありません。私は個人的体験を通じてもっと知恵を得る必要があるのです。そのことを私はやろうとしているのです。それは他人を松葉杖として頼ることで達成できません。むしろ個人の努力、愛、誠実さ、信念などで成就されるにちがいないのです。私は精神感応者（テレパシスト）でもなければ信仰治療家でもなく、また私

の内部に私が求めるものにたいする解答の多くがあるとも思いません。私は他人の言を聞くことはできますので、そうしています。しかし人間の自我を一そうよく知るための実行と深い欲求からのみ来るところのあの内奥の確信を私は持つ必要があるのです。……推論するよりももっと高い深奥から来る知識に気づくために……。私が個人的な体験を通じて知恵を得たときに私は指導者としての資格を得ることになります。あなたはアダムスキと私の両方のために御自分の心のなかに余裕を残していますが、これはほんとうに有難いと思います。私は区別というものをしようとはしません。真実の生き方と私たちに与えられてきた知識の立証のしかたについて私が知る限りのベストを尽くそうとするだけです。

昨年八月あなたに差上げた私の手紙をあなたは再プリントしていますが、（註。ルーシーからの手紙の一部をコピーして各国協力者へ送ったことを意味する）私は自分がひどい誤ちをおかしたことに気づいて、随分残念に思っています。あなたが引用した私の文章の第四行目に、「そうすることによって彼は（註。アダムスキは）古い束縛された諸理論のために役立つ（so help）云々」とあるのは、「諸理論を打破し（so on each）」とすべきでした。（註。本誌第一号の6頁にこの誤りのままの訳文が載せてありますが、ルーシーの原文が so help となっていたため、おかしいなと思いながらも字句どおりに訳しました）あれは長い複雑な文章でしたね。きっとあなたも変だと思われたことでしょう。その手紙を読み返したとき、私も自分の構文法を正すのに困ってしまいました。このことは、英語で育てられた、外国語を知らない私たちにとっても、英語が如何に難かしいものであるかという一つの証拠にもなります。あなたはきわめて優秀です。（註。恥ずかしいことでして一）私も外国語を用いて活動できたらたと思います。ですから手紙を書きたくなったらどうぞ御遠慮なく書いて寄越して下さい。あなたからの私信を受けとるのはとても楽しいのです。

御存知でしょうが、来月発生する遊星の〃合〃は、時が近づくにつれて次第に興味をひき起しています。私は科学者、天文学者、占星家などの報告を聞いていますが、二万五千年にさかのぼって歴史的な記録がありませんので、期待すべき事柄についての彼らの声明は臆測以外の何物でもありません。何が発生するかをただ待って見るより他に仕方がないと思います。また私は世界中の気象状態に特別な興味をもっています。気象の謎を解く方法を知りさえしたら、発生すべき事柄や場所などについて、それが何らかのしるしを示すかもしれません。と同時に、私は知識を求めながら、私の生活を満たしている多くの祝福に感謝しながら日々を生きています。三月になればこの〃合〃が私たちの遊星にとって如何なる影響を及ぼしたかがよくわかるでしょう。またこの太陽系内の他の遊星全部が如何なる影響を蒙るかを知ることも面白いでしょう。きっと何かとてつもない事が全遊星に影響を与えるにちがいないからです。これについての知識をもたらすものはたぶん宇宙人（ブラザー）でしょう。なぜなら、〃同胞記〃のなかで、金星では地球上で起った出来事について七千八百万年にわたる記録をもっていると述べてあるからです。しかし宇宙人（ブラザー）は地球人に知らそうとしてはいないように思われます。これは賢明なことだと私は思います。個人にせよ国家にせよ、未来が私たち人間に何をしようとしているかについて知らされたとすれば、その結果大恐慌が起ることを考えてごらんなさい。人間は体験を通じて教課（レッスン）について努力し、それについて知るようになるまでは、その教課（レッスン）を理解できないのではありませんか。これは学校における学習ばかりでなく人生を通じて云えることです。人間にとって知っておくほうが賢明だと云えるような事柄は、

与えられるものであると私は聞いています。たぶん解答のすべては今手のなかにあるのでしょうが、心を静めて聴きとる術(すべ)を学んだ人が殆どいないために、その解答を読みとることができません。私は長いあいだにそれを学んでいるべきだったのですが、実はそうではありません。あなたは如何ですか。私はその国で努力していますが、進歩はカタツムリの歩みよりも遅いように思われます。それは忍耐力を必要としますが、それを私も発達させようとしているわけです。

今こちらの南カリフォーニアは素敵な暖い気候ですが、しかしときおり夜半には海岸や奥地の谷間に霧がたちこめます。こちらではとても雨が必要なのです。また他の地域では暴風雨、竜巻、大雨、みぞれ、雹(ひょう)、氷などの害を蒙っています。報導によりますと、ヨーロッパと英国諸島もひどい天候だそうですが、他の国々からの報導がありません。アジアの多くの地区で戦争が起っていることを聞いていますが、しかしこれは人工的なものです。と同時に、人間が互に相手にたいする現在の態度を変えなければ、戦争も危険な状態になるかもしれません。しかし気象状況については報告がありません。それでそちらのほうの状況を知らせて下さいませんか。

一月七日

ルーシー・マクギニス

＊

以上の文面からして、ルーシーがアダムスキのもとを離れたのは全く彼女個人の意志によるものであろうと思われます。つまりルーシーが非常に賢明な人であるために、そうした英才にありがちな強い独立意識によって、個人的体験を通じての自己探求を志したのではないかという臆測です。アダムスキを決して否定していないばかりか、むしろ"同志(ブラザー)"の内容を依然として重視し、宇宙人に期待を寄せている彼女が、簡単にサイレンス・グループに誘惑されたとは思えませんが、しかし事態がこのような結果になるとは彼女も予想しなかったことでしょう。どのように考えてもルーシーの離別は個人的求道問題にほかならないとしか云えません。こうなるともはややむを得ないことでして、ただ人間の心の神秘性を感じさせられるばかりです。シャカが王宮を飛び出たのは全く彼の心に芽生えた"未知なるものへの憧憬"がそうさせたとしか云いようがありませんが、人間のこの自動的(オートマティック)な不可思議な欲求こそ問題とされるべきものではないかと思うのです。

ところで、右のルーシーの手紙のなかに遊星の"合"に関する一節があります。これは今年二月に発生する天文上の珍らしい現象で、海外のUFO研究界や心霊研究団体などでは、この"合"を機会に地球に大激変が発生するという説がかなり流れておりますが、アダムスキ側は断固否定していますので、次にC・A・ハニー氏が彼のニューズレターNo.1で質問にたいして回答している個所を掲げます。

問　一九六二年二月に遊星群が"合"になるとき起ると云われている大激変についてはどうですか。

答　これらの空想的な予言の殆どは心霊的な源泉から来るもので、事実として信じ難いものです。これらの源泉のなかには宇宙機の大量着陸から世の終末に至るまであらゆる予言をしているのもあります。私は異常な出来事を何も期待してはいません。真実の宇宙人は一定の時日に物事が起るとは予言しませんし、何かを行なおうと約束もしません。

ジョドレル・バンクの神秘

ーソ連天文学者の驚くべき告白ー

この物語は一九六一年五月二十一日にロンドンの〝サンデー・タイムズ〟紙に載ったニューズで始まる。すなわちジョドレル・バンク電波望遠鏡がソ連の金星ロケットに搭載された非常送信機から発信されたと思われる信号を受信したというのである。計算によるとこのロケットは金星から六万マイル以内を通過していた。これは昨年二月十二日に打上げられたが、三月二日にモスコウは、主発信機がたぶん流星と激突したために電波連絡が絶えたのだろうと発表した。そこで前記のジョドレル・バンクの声明は広く興味をよび起し、このニューズは殆ど世界各国の新聞に報道されたのである。

この当時の公にされた記録、ジョドレル・バンクの科学者はその信号が正しい方向から正しい周波数で来たと確信していることを忘れてはならない。残念ながら、信号は解読されなかったが、ジョドレル・バンクはその信号が金星の付近から来つつあったと感じたにちがいない。というのは、科学者はそれをテープに録音してそのコピーをソ連へ送ったからである。

ソ連でも感じた

ソ連がこのテープ録音を聴いたとき、彼らも同様な印象を受けたにちがいない。もちろん専門家達は信号がどこから来たのかを決めることはできなかったけれども、彼らはその〝通信〟が非常発信機に使用されるコードに似ていると考えたのかもしれない。その結果、ソ連の女流天文学者、アルラ・マセヴィッチ教授は、英国へ来て直接に自分で聴いたらどうかというジョドレル・バンクからの招待に応じることに決めたのである。

六月十六日にロンドンの〝タイムズ〟紙はこの調査の結果について詳細な記事を掲載した。「宇宙探知網の女流指導者アルラ・マセヴィッチ教授と、金星探険計画の権威ホダレフ博士の二専門家は、ヒケットは進路をそれて、地球からの信号に答えていないことを確信して土曜日にロンドンから空路モスコウへ帰る予定である」発信源の位置を正確に知るために、ジョドレル・バンクは、地上命令の方法で金星ロケットと連絡を試みようとしていたソ連の科学者に協力したのである。

更にタイムズ紙の記事は、ロケットが進路をそれた理由についてマセヴィッチ教授の説明を引用している。記者会見の席上、次のようなきわめて重大な発表が行なわれた。

すなわちロケット内の発信機は五日おきに九十分間信号を送るようにセットされていたとマセヴィッチ教授は説明した。この信号というのは十七分間の変調されない信号と科学上の情報を伝える十七分間のコード信号とから成っている。ジョドレル・バンクで受信された信号はこのコード信号によく似ているが、それは地上で発射されたものであることがわかった。たぶんどこかの地域のアマチュア無線家の出した電波で、望遠鏡が地平線に向って一杯の角度に傾けられたときにその信号がキャッチされたものだろう。ところがマセヴィッチは金星自体から無線信号が発射されたのかもしれないという説を完全に認めたのである！

タイムズ紙のこの記事を読んだあと〝フライイング・ソーサー・レヴ

エ・〃誌の編集長はジョドレル・バンクの渉外係長へ電話をかけたが、〃レヴュー〃誌の者だとは云わなかった。編集長が発した最初の質問は次のような回答を得た。〃すりあの信号が人工的なものであることは疑いないというのである（すなわち自然の原因によるものではない）。続く質問は、〃地上〃という言葉はジョドレル・バンク地域とは別な地方を意味するものであることを確かめた（すなわち、この地球のどこかからというのではなく、マンチェスター方面の或る発信源からということを意味する）。三番目の質問は最も驚くべき回答を得た。編集者は尋ねた。「あの信号が〃人工的〃なものであることは確かだとおっしゃるからには、あれは金星から発せられた知的なメッセージであることを意味するかもしれないという可能性をマセヴィッチ教授が認めている点にあなたは同意しますか？」回答が述べられる前に意味深長な沈黙が続いた。「その考え方には非難の余地はありません」と渉外係長は答えたのである。続いて彼は、マセヴィッチ教授の説明に英国科学者連盟が驚いたとつけ加えた。英科学者連盟はこの可能性を認めたかどうかという別な質問に答えて渉外係長は、自分で答える前に天文台長のバーナード・ラヴェル卿に相談する必要があると述べた。彼が前述した理由は〃彼らが宇宙船と円盤と結びつけられるのを望まなかった〃ことにあった。この三番目の回答はたぶん三つのうちで最も意味深長なものであった。なぜなら編集長はこの異端視された円盤問題に関してすべてを避けることに最大の注意を払った点が強調されねばならないからである。宇宙船や円盤に結びつけてはならないという懸念は、マセヴィッチ教授があの知的な通信は〃金星から発信されたのかもしれない〃という可能性をかくも無雑作に考えたとき、英科学者連盟が〃驚いた〃理由を説明していると云ってよいだろう。渉外係長がバーナード・ラヴェル卿に相談した後（たぶん次に云うべき事柄について）、彼は編集長の〃誤ちのない考え方〃について先に言及したことから逃れようとした。彼らは信号が〃地上の発信〃であったという点にこれ以上確信はなかったのである。信号は必ずしもマンチェスターの近辺からではなく、実際にどこかから来たのかもしれない。それは今や〃正体不明〃の状態になってしまった。マセヴィッチ教授の云った言葉は何を意味しようとしたのかと尋ねてみると、教授の言葉は冗談だったのだと云う。これは渉外係長が以前に云いそこねたポイントである。そして係長は多くの辻褄の合わない話を続けた。結局編集長はあの通信が実際に大気圏外から来たのか、それともコールトン・カム・ハーディーから来るのか疑惑に包まれてしまった。その上、疑惑はなおも信号が人工的すなわち知的であるという点にも投げられたのである。ひょっとすると自然の原因によるものではないだろうか。

以上のエピソードは多くの興味ある点を含んでいる。ジョドレル・バンクの装置は世界で最もすぐれた、並のかかったものの一つである。それは宇宙、特に遠距離の星々に関するわれわれの知識を拡げる手段として建設された。マセヴィッチ教授とその同僚は失われた金星ロケットから発信されたと思われた信号を聴くためにモスコウから遥々旅したのである。彼女がその信号を確認できなかったときでさえも、彼女はそれが金星の近辺から来るという事実をなおも全く明らかに認めていた。彼女の訪問のあいだかその後に、発信は地上的なものだという示唆があり得たとわれわれは果して信じてよいものだろうか。もし地上的なものだったとすれば、その発信元はジョドレル・バンクの如き装置よりももっと小型の機械で探知できたであろう。（逓信省ならば数時間でその発信者をつきとめることができたであろう）　もしアマチュア無線家がその信号の張本人であるとするなら、マセヴィッチ教授はモスコウからの遥け

き被が実際に必要なものであったかどうかを考えたであろう。しかし彼女は全く楽しそうで、しかもなおその〝冗談〟を気にしていないように見える。この冗談は英国へ来る大抵の〝連〟の役人のいつもの習慣さとは違って、歓迎すべき変りようである。

ところでジョドレル・バンクの博学者連の態度である。彼らは円盤と関連することの絶えまない恐怖のなかに生きているにちがいない。この運命に賭けるよりもむしろ彼らはナンセンスを語り、以前に云った事柄を否定したりするほうを好んでいる。これは誰かが彼らに円盤ファンになってもらいたいというのではない。ただ彼らがすべてを知っていないということを認めさえすればよいのだ。そうすれば、それな物は存在しないのだといったたのりをするかわりに、人間は神秘を解明することができるだろう。（フライング・ソーサー・レヴュー誌一九六一年九・十月号より）

以上の記事の翻訳はきわめてまわりくどい書き方がしてありますが、要するに、ジョドレル・バンク電波望遠鏡が捉えた微弱な電波は〝連〟の会員ロケットからのものではなく、むしろ金星自体から発信されたのかもしれないということを〝連〟の第一流の天文学者が告白したにもかかわらず、英科学者、特にジョドレル・バンクの〝博学者〟たちは言を左右してそのことを認めようとしないのはなぜか、といった内容です。その他の多くの情報によりますとジョドレル・バンクは多数の警察的な体験を持っているようですが、内容は殆ど洩らされてはいないと云われています。もちろんそうあるべきでしょう。

× ×

雑報

◎仕事は終った——アダムスキは講演家としての仕事を終えた。彼は一九六一年九月九日にサンフランシスコのダニエル・フライの主宰する〝アンダスタンディング〟の本部で〝宇宙哲学〟について語ったのが彼の公開講演の最後である。このことはルーシー・マクギニスが我々に知らせた言葉「アダムスキは広範囲に〝現役〟のリストから退きましたが、これは個人的な指導や著作に専心するためです」を実事きするものである。更にルーシーは云う。「私たちが遂行するために召集された仕事は終りました」云いかえれば、必要な知識のすべては今やアダムスキによって啓蒙されてしまったのであり、それをできる限り応用するか否かは我々次第であるということになる。（英国盤研究誌〝オービット〟一九六一年八・九・十月合併号より）

◎聖杯はなかった——真相は遂に現われる！ ウィリアムスン博士がグラストンベリーの聖杯井戸を発掘するという報道が流れてから数ヶ月になる。ウィリアムスン氏はその地で発掘を試みたけれども、この名高い土地の探索で彼を熱中させるような物は何もなかった事実が判明している。ついでながら、この聖杯井戸に興味をおもちのかたは、W・テューダー・ポールの一連の著書、特に〝沈黙の道路〟からお読みになることをおすすめする。（右に全じ）（註。グラストンベリーは英国南西部サマセット州の古都で人口五千、アリマテヤのヨセフがイエスの聖杯を携えて来たという伝説の地です）

◎スイスのサイレンス・グループ——「私の国

スイスではサイレンス・グループが正体を現わしました。円盤問題はゼロにはっています。私が自分の円盤写真コレクションを持って新聞社へ出入りすることは不可能なのです。私はそれを何度も試みました。今私は、私宛に電話をかけてくる人に写真を見せたり話をしたりして個人的に啓蒙活動を行なっています。というわけは、大抵の人は私を〝一人の野郎にまいっている女〟とみているからです」（スイスの協力者ルウ・ツィンシュタークの女史からの十二月二十八日付私信）

◎金星とアダムスキー――金星の大気に関する天文学者フィルリフの記事のなかに、一九五四年に私が訪問した隊ジョージ・アダムスキが私に与えてくれた知識について注意すべき確証がある。そのときアダムスキは、地球の大気に非常によく似た金星の呼吸できる大気を地球人がつきとめることができなかったのは、ただ観測法が十分でないからだと語った。彼が会った宇宙人たちの話によると、地球人がもし大気圏外へ観測装置を運ぶことに成功したならば（これは米国の成層圏気球で実際に成功した）、もっとほんとうの状態がわかり、大気の状態についての二つの誤りが如何によく似ているかを知って驚くだろうという。また、金星の一日は地球のそれよりも少し短かくて、一般の気温は少々地球よりも暑いが、地球ほどに異常の暑さは激しくないとも語ったという。またアダムスキは、有害な放射線を防ぐ、大気上層の或る保護的な層についても話してくれた。私の記憶が正しいとすれば、これが金星人の長命の原因の一つだとアダムスキは話していた。率直にそうと、そのとき私はこれは少々変な話だと思ったが、回想すると、アダムスキはフィルリフの云うCO₂の雲層のことを云っていたのだと思う。

要するに、フィルリフの記事は驚くべき確証である。――デスモンド・レズリー（フライング・ソーサー・レヴュー誌一九六一年九・十月号より）（註。フィルリフの記事というのは、フライング・ソーサー・レヴュー誌一九六一年七・八月号に掲載された記事〝生命の住居としての金星〟を意味します。それによりますと、一九五九年十一月に米海軍とジョンズ・ホプキンズ大学が協同で金星研究用の成層圏気球を打上げたところ、赤外スペクトル写真が得られて、これは英国二五〇の高い雲の上にある水蒸気よりも、金星の雲の上にはもっと多くの水蒸気が存在することを確証し、それによって水の存在が確認されたことや、オハイオ州立大学のJ・クラウス博士が電波観測により金星の自転周期を二十二時間十七分と測定したことなどをあげ、またスペクトルで酸素が検出されない理由としては強放射線による解離作用などを説明して、最後に「要約すると、現在のところ金星は〝生命の住居〟であるように見える。少なくとも地球と同様に快適な状態であろう」と結んでいます。これは純粋な科学的解説できわめて興味ある記事です）

◎二、三年前にキャクストン・ホールで或る会合が終ったとき、一人の紳士が前へ出て（註。二人の娘が或るタ方ウェイルズの或る湖の近くで二人の金髪の男に出会った。彼らは娘たちを近くに停止していた空飛ぶ円盤型の〝機体〟の中へ招じ入れた。娘の一人は数学がダメだったので、男たちが彼女に手ほどきをしてやったところ、三十分位して彼女は数学の天才になった。家へ帰ってから村人はこの娘たちを魔女と呼び始めた。そこで彼は（始めの紳士は）――どうも娘たちの友人か家族の者だろう――娘たちをロンドンへ連れて行った。そして彼は、無数の数字を記憶する競技でこの娘を負かす者がいれば一千ポンドを出すという。彼はどこかのステージでこの競技をやっている娘の写真を高く差出した。しかし会合が終ったとき、別な人から話しかけられたので、この男の姿をそれ以来見失っている。――G・A・N・スティーヴンス（レヴュー誌より）

ー編集後記ー

◎ 先ず、各方面から寄せられました絶大な御支援と激励の辞に厚く御礼を申し上げます。このところ多忙をきわめておりましたため、第四号の発行が遅れて申訳ありません。今号はタイプ印刷にするつもりでしたが、どうも印刷費が捻出できず、またガリ版にしました。無理押しをして一度やり二度タイプ印刷にしてもあとが続かねば意味をなしませんので、その点を御諒承下さい。

◎ 今回でアダムスキの〝訣別〟の内容の紹介は終りますが、かねてから注文していた〝宇宙哲学〟が二月末か三月上旬に到着すると思いますので、次号からはおそらくこの全訳を連載できると思います。なお、これは翻訳アシスタントに〝精神感応〟に加えて今本とし、〝精神感応と宇宙哲学〟と題して活字にしたいというのが目下私の最大の念願の一つです。

◎ 翻訳したい本はまだ他にもあるのですが、時間的余裕がなくてどうにもなりません。現在は暇をみてクリシュナムルティーの〝Commentaries on Living〟（生きるための助言）を読んでいますが、これは私がこれまでに読んだ万巻の求道の書のなかで先ずトップクラスに入るものと私はみています。思想的にはアダムスキとよく似ており、他人の哲学の焼直しではないようです。要するに、他の思想に捉われないで完全中立、全く自由な白紙の状態にまで自己を高めることの重要性を説いています。ゆえに、〝クリシュナムルティー派〟とか〝アダムスキ派〟とか〝ABCメンバー〟だの〝成長の家信徒〟といった一家一派の烙印を自ら自身につけて喜ぶ〝同一化（アイデンティフィケイション）〟の態度は誤りだとするクリシュナムルティーの言葉に私は深く考えさせられるのです。やはり〝共鳴〟という問題が個人の思考力の飛躍的上昇をはばむ最大の原因であるとしか思えません。

◎ 「どこにも悪魔などいはしない。それはただ自分の心のなかに巣食っているだけだ」というアダムスキの哲学はどう考えても真実をうがつものだろうとしか私には思えないのです。その〝心〟という巨大な怪物をさておいて、他人を非難攻撃することの好著ったさ、イヤらしさは〝間違い〟というよりもむしろ本人自身の悪魔的存在を冒涜するだけのことと思われます。一コンタクトマンが真実自己の体験が間違いのない事で、人類にたいする責任であると確信しているのなら、何も他のコンタクトマンの真偽性を躍起になってせんさくしたり攻撃したりする必要は全くない筈のものを、感情的にそうなるような或る実例を私は非常に興味深く見るものです。

◎ 私は職業上、知能の低い特殊な少年たちを指導する仕事をやっていますが、この集団生活で私が痛感することは、人間にとって〝自ら考えようとする力〟が欠けているくらいに不幸なものはないということです。そして指導する側にとって必要なものは全く〝忍耐〟の一語に尽きるのであり、個人的な説教などは一切意味をなしません。つまり彼らが体験によって生長するのを〝待つ〟より他に方法はないのです。進化した遊星の人類が地球人を指導するとすればおそらく全く同様の状態にあるでしょう。しかしこの非行少年たちにも何かしら真実なるものがその底を流れているのを私は感じています。やはり希望というものを持つべきでしょうか！

G・A・P JAPAN ニューズレター No.4
編集発行人 久保田八郎
発行所 島根県益田市益田川ノ五九三
日本G・A・P
昭和三十七年三月十日発行 頒価 五〇円